

鶴の篝燃え立つ岸の若葉かな
篝消えて魚たゞ白き鶴舟かな
稻妻や鶴川淋しく更けにけり
下鶴飼月に淋しく戻りけり
下鶴飼になりぬ出水のひいて後
舳を並めて鶴舟の篝今や焚く
鶴飼三年見ず此地俳風の變

川 牀 川牀に一人ともなき一人かな

蚊 帳 蚊帳吊りて女手のなき住居かな

肱かけて蚊帳に寄る魔の丑満つる
蚊帳の灯の自づと明し夢照らす
如何にして蚊帳錯落の夜の雨

水 泳 人來つて泳ぐ櫓の月夜かな

泳ぎ子の蛇の卵を呑みにけり
泳ぎ場にあるや河伯の枕石
泳ぎ場に誰が狂はしき母ならん

行 水 行水をすてゝ湖水のさゝ濁り
行水や童ボカと歸りけり

裸

裸身に網干は糝りけり
御像の裸身に珠履を召されけり

避暑

暑

避暑の宿銀屏に京間疊かな
海を渡る小舟に避暑の行李かな
杳ぬぎに家鴨も來るや避暑の宿
避暑に來て君書を讀まず行李の書
藥やれば泣く婆殿や避暑の宿
演説をして瓜貰ふ避暑の宿
舉家來游と見ゆる童女や避暑の宿

避暑浦や美女に別れし古歌のあり
齋らせし米と琥珀や避暑の宿

動物

時鳥 蜀の馬に歸心南す子規

杜鵑臺に大なる月の上りけり

耕村の戦塵句屑を讀む

鞍摺れの瘤が句になる時鳥

明き星傾く空や時鳥

時鳥 筥折りし夜空かな

留別期する處を述ぶ

少壯の諸兄在るなり時鳥

安田氏一泊

寢残れば月にやなりし時鳥
船待て見る月代や時鳥

津輕某驛

木置場の番屋の月や時鳥

シカタ荒れし風も名残や時鳥

閑古鳥 此山は高野をうつす閑古鳥

鶯はしば鳴き閑古鳥は時に鳴く

噴火後の温泉に住む家や閑古鳥

髻の山風俗や閑古鳥

逆川に子の落ちけんを閑古鳥

水 雞

愚庵庵を移す伏水や鳴く水雞
水雞來し夜明けて田水滿てるかな
庵に鳴く聲を水雞と定めけり
閑人の沓踏みにくる水雞かな

行々子

行々子葭も残りて文庫かな

千住

網船の滿潮時や行々子
離れ鶉の來る湖べりや行々子
行々子はそら鳴く早き泊りかな

浮 巢

鳩の巢の靜かなる日の暮れにけり
巢やありて鳴く水鳥や能登通ひ
水鳥の巢を出て鳴くか靄の中

砂を踏む道しばし來しが行々子
風ぐまでを吹く夕風や行々子
流れ藻も風濁りして行々子
裏に導けば梅檀の風や行々子
葭切に臥龍の松の茶店かな
漁小屋に竹生えつ居鳴く葭切か

蝙蝠 蝙蝠や水車の精米^{しらけ}上げに出て

鯉 櫓揃へや波太が漁長鯉舟

蹴埋めに砂の鯉も漁勢ひ

旅人や鯉に飽けば布良鱸

鯉舟七立テ戻る又三立

鮎 横へし朝の反身や鮎三尾

碧潭に鮎かゝやかす底澄めり

鮎掛や浅間も低き山の中

檜磨ぐ前を鮎網打過ぐる

鶺鴒の鮎の尾鱗さめたる白さかな

鮎活けて朝見んを又た灯ともしぬ

鮎の味 全山翠滴りぬ

鮎打ちの打ちそめし頃や通り雨

甲州は富士の根の國鮎の味

酒押しにせし鮎待つやま一と時

鮎掛や羅漢寺川も岩立ちて

鮎追ふと綴る羽真黒照る見居る

金魚 金魚飼うて能の太夫の奢かな

ながくと幾日金魚の糞の耻

蛇

しだり尾の錦ぞ動く金魚哉
眞白くて出目の金魚が一つかな
縁ばかりまはる金魚の尾切れ哉
珠枇杷の長崎にまた金魚かな
金魚屋の構へし池や浅蟲に
洞門をくゞる獅子王金魚かな
蛇を見て草高き道もどりけり
蛇の渡るも池の深さかな
大楠の里藺を刈れり渡る蛇

蛇の衣

古家や白にかゝれる蛇の衣
幽叢に白く全たき蛇の衣
麥藁をきのふ積みしが蛇の衣
早して果樹の葉よれや蛇の衣
蔓草もかゝる茶の木や蛇の衣
雞叫びも蓬高さや蛇の衣

火取蟲

瓦斯燈や谷中の森の火取蟲
清水に灯一つともる灯取蟲
人あらで灯たゞあかし灯取蟲
堂塔の中の灯や灯取蟲

螢

灯取蟲一つ女の髪に落つ
枕蚊帳にともす静かや灯取蟲
夏蟲も飛ばす不斷の灯かな
晝焼きし蟲の幻灯をとり
看護人に一夜いとまや灯取蟲
楯圍ひして灯あるなり蛾の影も
鳴る羽を簀戸打つて灯に遠き蟲
馬斃れしあと掃く水や火蛾のとぶ
すべり落つる薄の中の螢かな
嵯峨の松螢六日の月夜なり

馬獨り忽と戻りぬ飛ぶ螢
灯あかき紙端に落つる螢かな

鹽原

行く螢白雲洞の道を照らす
假寝して覺れば水の螢かな
簾這ふ螢もおそき夜なるかな
持て行きし灯來ぬ間や飛ぶ螢
亂螢の射かはす水を夾みけり
雲板の下苔水の螢かな
夜叉王の手に炬の如き螢かな
螢籠櫛賣る家に吊しけり

葭村に落つる流れや飛ぶ螢
四ッ橋の納涼螢を袂にす
船に乗れば山谷心や飛ぶ螢
蘆の流れ廓になりぬとぶ螢
流螢を左右に撲たばや水馴棹
葉に盛りし膾の上やとぶ螢
琵琶湖
エリを越す頃より螢見えそめぬ
鯉虱とりし晝螢夕雨に

蝸牛 芭蕉庵こゝに籠れと蝸牛

いつ落ちて盥の水に蝸牛
藤蔓も草の中なり蝸牛
荷鞍干す手元に見えて蝸牛
殻になりし蝸牛落つや午の風
桑老いて脂木になりぬ蝸牛
朽木覆ふ葉蘭に見えて蝸牛
蝸牛や草庵に生ふる葭少し
毛蟲
ほたくと毛蟲落ちたり潦
毛蟲焼きし夕覺め雨の蚊火うつり

墓

萩の下葉の汚れたるに墓の這出でつ
木香を焚くこの家の主墓ぎらひ
夕暮の堤に墓の出でにけり
蚊柱や墓の居すます夕空に
墓出るや上野の山の水たまり
立て捨てし白の邊まで墓
墓出るや射塚も残る草の中
水垢桶に墓も汲まるゝ田舟かな
衝立の内墓をるや夕間暮
塔の下墓出でゝ九輪睨みけり
山墓に水白し苺壘む雨

蟬

親不知

蟬なかず空なる浪に親しらず
巴旦杏蟬さすひまをゆり落す

草庵

蛸の庵といへ蟬遅ければ
蟬涼し朴の廣葉に風の吹く
落ち蟬の砂に羽搏つ尙暑し
毛蟲桃伐らんとぞ思ふ蟬の聲
麥干せば蟬とる蛇のわたりけり

宇治途上

蟬の聲穂麥がくれに聞えけり
砲彈の調べを陣や蟬の聲
蟬鳴やく木の葉に包む糧一日
蟬鳴くや耳にも馴れて地獄鳴り
まこと心耳澄む蟬や樓門の景
山蟬の身延鳴き富士へとる道か

蠅

頑居士打つて疊に印す蠅の迹
時づもりする旅や蠅も居つく様

蚊

暗きより蚊の聲出づる庵かな

納

宗鑑の兩手に拂ふ藪蚊かな
晦朔の勤めにやせて蚤蚊かな
山百合を束ね抽す蚊の夕かな
明日葺かん藁積む宵や蚊の出る
朝風に蚤蚊の跡をさましけり
蚊柱や虫焼きし園の夕明り
蚊柱や鐘樓の方に草深し
木調べの匠が手記や蚊の夕
廓通ひ蚊を團扇打つ船頭かな
糧道の車塵の納に蟄されけり

雨蛙

睡蓮の花や雨蛙時に鳴く
水溜り覆ふ大樹や枝蛙

翡翠

川蟬や葦探る舟去つて後

蜘蛛の子

蜘蛛の子や親の袋を噛んで出る

蚤

ひやくくと居て蚤の喰ふ五月かな
蚤も知らず安堵の酒に寝たりけり

飛蟻

飛蟻立つて静かに暮れぬ池の水
銀杏高く空に立ちそふ飛蟻かな
鎌倉や小黍畑に飛蟻とぶ
凌霄の花松の木に飛蟻立つ

水馬

蘆の間の水泡につくや水馬
簀の中のゆるき流れや水馬
水馬藻の花首のちよほくりに
エリの影暮るゝ静かや水馬

蛙

蓮池や蛙遊び出でゝ深き水

才 才
才 才 や 天 水 桶 に 魚 放 つ
水 熱 し 才 才 し づ む 手 洗 鉢

植 物

桐の花
桐の花 葵 祭 は あ す と か や
門 前 の 桐 花 咲 い て 日 は 高 し
茶 畑 に 桐 の 花 咲 く 在 所 か な
桐 の 花 の 梢 に 残 る 嵐 か な
空 溝 に 桐 の 花 咲 く 鳥 丸
天 領 の 境 に 咲 く や 桐 の 花
花 桐 や 四 歳 見 惚 る 馬 の 艶
圓 山 の 焼 跡 見 る や 桐 の 花
鬮 雞 の 籠 飼 ひ の 數 や 桐 の 花

花桐や藪の醍醐の爪上り
木を挽くも二年普請や桐の花

谷汲観音

門前の走り水花桐に来て
番町時代花桐に思ふ遺作ある

餘花 市中や木深く住ひ残る花

夏藤 鳥居入つて夏藤咲くや秋葉山

杜鵑花 さつき咲て檜葉に夕日の輝きぬ

九段招魂社

槐の花 山を裏に槐の花の宿りかな

合歡の花 乳牛の角も垂れたり合歡の花

合歡 咲くや河水を汲む桔槔

花 栲 大利根の水守る宮や花栲

茨のちる水を覆うて栲かな

川原越えて岸邊水ある花栲

古池の松と離れて栲かな

吹井ある栲の下に酒屋かな

柿の花

蟻のすむ庭の積木や柿の花
炊事場の雞飼ひ居るや柿の花
棚梨の枝伸び立ちぬ柿の花
度會の女が許や柿の花
石を築く谷間の家や柿の花

栗の花

照り雨や茂りの中の栗の花
栗の花こぼれて居るや神輿部屋
鬨ひし牛とりこめぬ栗の花

櫻欄花

寺の内の小學校や櫻欄の花
山村の岩立つ寺や櫻欄の花

枇杷の實

蟻の道つきたる枇杷の梢かな
古里や唐川枇杷の贊のホ句
枇杷賣のいち早きをる繭の市
枇杷の實をとる頃藁蝕みぬ

病中

枕邊をつくろうて枇杷持ち來る

子規子を思ふ

歌王によみ残されし枇杷のあり

棋數局吾好む枇杷出されけり

七尾に入り太門太にあふ

青梅のちざりを忘れずるべきか

早桃瓜時にうれしく赤き早桃かな

林檎目に青葉白丁の花林檎かな

姫宮の御避暑の里や林檎園

浅蟲の潮の色に林檎かな

境木の蟲うつりせし林檎かな

若葉谷間の樹高うして若葉かな

鶯に若葉嵐や井の頭

若葉日さして小鳥など鳴くうれしき

町つゞきになり行く里の若葉かな

隈々や若葉を浸す池の水

貝吹いて山開きする若葉かな

神事近き作り舞臺や楠若葉

夕鳥の貝吹く青葉若葉かな

飛乗の駈を打ち過ぐ若葉かな

雨の若葉梁にや映る山家かな

飯綱より雲飛ぶ像の若葉かな
宮前徒涉濡れ足を芝に槻若葉
山ぬけの水さゞら若葉逆木なる
焼山がくれするちよほと若葉の螺峰のみ

愚庵碧梧井

青葉 桐にしてかぶさる井戸の青葉かな

夏木立 夏木立深うして見ゆる天王寺
こなたより富家見えざるや夏木立
坊に會す約を履み來ぬ夏木立

時明りする木の肌や夏木立
軍港に定まれる灣や夏木立
廚丁の折る花のあり夏木立
稚兒岩の謂れも夏木浸す水
草分けの神業の水や山夏木

木下園 石蔭の葉の燈籠を埋む木下園

九段招魂社

唐風の庭も古りたり木下園
茨散つて水の光りや木下園
葉濕りに垂るゝ蟲あり木下園

穹窿を出る僧徒や木下闌
じよろ水の蔭の下闌流れけり
無扉門を狐狸の通ふや木下闌

茂

葛干して茨咲く里の茂りかな
高祖記に残る渭水の茂りかな
鶴灣に高き帆見えて茂りかな

若楓

若楓駟馬の秣の食みこぼし
篝屑に蟻の寄り場や若楓
若楓櫻木虱移りけり

書の弟子に畫才この兒や若楓
帶屋風の勝祭など若楓
葬旗かゝれば鳴く雨鳥や若楓

夏柳

晝泊り一二の宿や夏柳
新關の水のほとりや夏柳
辻能の班女が舞や夏柳

松落葉

松落葉參禪の山に入りけり
葭の中に宮居の道や松落葉
池のほとり露佛あるなり松落葉

蝦夷船に備へし跡や松落葉
實櫻も地に印す松落葉かな
海邊行けば這ひ草咲いて松落葉

凌霄花

子生れて凌霄の花盛りなり
凌霄の花に藁屋や菖蒲園
凌霄や虎溪の松の颯々と

薔薇

花薔薇の小さきを鉢植にせし
花替りして鉢植の薔薇かな
咲絶えし薔薇また咲く日數かな

ことし見る蜂屋多さや花薔薇

茨

香をさます夕風茨の野道かな
蓮沼を上る堤や花茨
花茨や十和田下りの一の驛
茨咲くやなど墾かずと訪ふ心
玉蟲の降り木奇し書窗花茨に

百日紅

百日紅に愚庵の扉開閉す
渴し来て水汲む宿や百日紅
蟲くひし葵立ちけり百日紅

大龍寺は百日紅の咲く寺よ

十薬 や 麥藁 かゝる垣の下

筍 の 伸びすぎたるも掘りにけり

筍 の 皮とるひまや話し勝

筍 を 掘り得て歸る畚一荷

吹き折れし筍もろて煮る日かな

積藁によろゝ筍伸びにけり

若竹 城壁の高き後ろや今年竹

溪水新婚

楓より竹より若き夫婦かな

柚の花 柚の花の板屋に落ちて蟲の如し

黄檗山

玉卷芭蕉 雲板もかゝりて芭蕉玉を卷く

庭を見れば芭蕉玉卷く銀河壇

帯木 帯木の生ひひろごりし小家かな

はゝき木に蔓草ついて草高し

卯の花

卯の花の咲く間はたゞの宿ならず
寝ざめして卯の花に聞く雨やらん
芋植ゑて遅き芽生やうつ木咲く
卯の花や前衛通る夜半の星

椿原に一休す

笈 凌 ぶ 人 も 卯 の 花 露 明 り

牡丹

會 心 の 宴 満 園 の 牡 丹 可 可
卓^ち 袱^ふ の 料 理 も 出 で し 牡 丹 可 可

山 施 子 歸 る

驟 雨 來 る 別 れ の 朝 の 牡 丹 可 可

新 亭 を 營 み て 牡 丹 移 し け り

芍 藥 や 須 磨 の 假 家 の 古 簾

葵 機 械 場 や 石 炭 滓 に 葵 咲 く

葵 咲 け ば 鄙 人 醬 油 つ くり け り
温 泉 の 神 の み て ぐ ら か へ る 葵 可 可

芥 子 野 に 出 れ ば 芥 子 の ち り 端 や 鷺 の と ぶ

垂 れ 首 の 芥 子 の 高 さ に 成 に け り
行 に も れ て 籠 り 居 淋 し 芥 子 を 見 る

芥子咲くや園主の麥も渡り種
深草の芥子と西石の名什と

百合

百合咲くや蘭に培ふいとまあり
山鴻は湖の舟つき百合の花
瘦百合の咲きつぐ蕾蝕みし
赤阪の游女赤百合早百合かな
樹の籠る裏戸出て畑の百合を見る

土崎某雜妓に與ふ

百合涼し右にゆれても左にも
二人いうて一句全し百合の花

茉莉花

百合の句に今の象潟思ふかな
噴烟の絶えし思ふや百合の咲く
麥に芥子の咲く里百合の家居かな

茉莉花の花こぼれある詩箋かな
茉莉花や蘇洲の人の贈り梟
茉莉花に墨やとばしる大雅堂
粉黛の前にまつり花咲にけり
まつり花や灯輝きて冷やかに

夏菊

夏菊の出来あしき年や萩伸びて

撫子 撫子や海の夜明の草原
撫子や高野の道の地藏堂

紫陽花 木苺や山紫陽花の咲くほとり
箱根古道紫陽花に瀧離れして

著我の花 梅若の塚や汝が著我の花

夕顔 夕顔や筑摩祭の宵月夜
夕顔や柑子の葉越し白き見ゆ

花菖蒲 花あやめ流されし人の冠かな

杜若 立寄るやホ句のゆかりの杜若

蓮 夏帽を吹きとばしたる蓮見かな
疾く起きて水車踏む人や田の蓮
黒谷の松や蓮咲く朝嵐
閣上に唱和の琴や採蓮歌
僧にいふ春星が句や蓮の池
採蓮の歌童謠に聞く日かな

蓮浮葉

舟を上れば一望の蓮や川隔つ
霞も交る蓮田を水鷄渉る見ゆ
柳島は柳も多し蓮所
左蓮右蓮雙輪の塔鈴を鳴る
東門外幕營の陣や蓮の風

摺鉢に蓮の浮葉の小雨かな

河骨

河骨の花に集まる目高かな
河骨のひろごり過ぎし網の中
河骨や鰕藻の中に花一つ

落

河骨や沼新田の松一木
河骨やあやめの實殻旱して
河骨の咲くや年々蓮のなき
河骨も繪圖にかきけり干満寺

鑛烟もほの匂ふ山や落の雨
寂莫と落さはす桶とさやぐ竈
落の葉に蜜盛りて園主又た訪はる
あらぬ方に山繭うつるや落の中
落の中に泣く赤子ぞと聞く隣

蓴

二つ池山中にある蓴かな
水馬動かす水の蓴かな
蓴生ふる池に手洗ふしづかさよ
入らずの森跡はあらねど蓴かな
隈濁りして雨晴るゝ蓴かな
又た水を搏つ大鳥や蓴舟

萍

萍に早苗あはれむ深田かな
萍の花白し太藺むらくと

菓亭

柏葉の風浮藻吹く且かな

麻

柳浸る水に浮草見え初めぬ

桑は伐りしがやがて麻刈るべき小村
夏蕎麥の花白う麻のそよぎ哉
蛇も見えて日中の麻の葉よれ哉
菅も干して麻も干し添ふ日和かな
焼石もかくれて涼し浅間麻
麻刈りしあと山蟻の歩みかな

綿の花

畑土の早き早や綿の花
玉造出て野稻荷や綿の花

苺

乳鉢に紅すりつぶすいちごかな
朴の葉を五器に敷き盛る苺哉

瓜の花

住み馴れし鄙の小家や瓜の花

飛鳥山途上

瓜の花三嶽莊の徑かな

瓜

白瓜の胡瓜にまじる美しくしき

森々来る子二人ありといふ

子あれども匂なきを瓜に耻ぢめらん

瓜積んで朝舟著きぬ流れ山

芥子散るや瓜もむ時の夕風に

瓜食うて我も上るや観音寺

露月庵

瓜割くや主が癖の自賛論

瓜年を馬の霍亂怖れけり

朴の木を湖を口碑の里の瓜

簀立てあり瓜漂ふや湖ほとり

思ひの外渡しの景やの瓜の里

子を叱るさまでもと思ふ瓜の宿

夏大根 貧乏な青物店や夏大根

輪島

麥秋 狐追うべく犬かけたりし麥の秋
街道に馬士の喧嘩や麥の秋
麥の秋 盜人らしき者通る
穂麥くふ馬も門邊やお輿入
麥の風鄙の車に乗りにつけり
里心麥に吹かれて戻るなり
麥の秋 匈奴逼ると聞えたり
松原や汐風防ぐ麥の丘

海近き砂地つゞきや麥の秋
海濁る津に上る旅や麥の秋

晝顔 晝顔や墓所のカナメの刈らずある
晝顔や杉菜の中に瘦せて咲く

青芒 狂ひ穂の雨に寒しや青芒

苔の花 猿糞も花かと岩の苔の花

夏草 夏草に夜獺をうつ田圃かな

夏草の刈らずあるなり能舞臺
畑草も茂る裏門や捨桑子
いつからの石割り捨てや草茂る
懶さも蜂屋捨てある茂る草
草茂る穂にブイくやなど多き
餅草もかほど藁立ついきれかな
草茂るばかり湖中の孤ツ島
草茂る温泉のほとり麻いきれして
鳶の住みし木枯れを草の茂るなり
橋名残葉慈姑あるを草茂る

雑

温泉百句 抄録三十五句

押立 五句

温泉の宿に馬の子飼へり蠅の聲
温泉の宿や裾野の草の茂る中
藏持て農具もすすし温泉の宿
嬉しさや湯口で洗ふ瓜茄子
湯治人皆百合折りに出でにけり
草湯 四句
硫黄焼きし窯跡暑し温泉の流

炎天の尙泡立て湧く温泉かな
温泉の山に作る青菜や五月晴
山の温泉や澁紙敷て敷團扇

上の湯 八句

きのふまでさみだれて居りぬ湯治人
溢れ温泉にこの谷茂る草もなし
山麓を温泉口に浸す一日かな
爐によりて麩食ふや湯治人
夕焼けて蟬も鳴かずよ磐梯温泉
温泉の花を取りに上るや雲の峰
岩燕温泉の戸に舞へる涼しさよ

一行に湯守が土用の馳走かな

川上 四句

ぬるき温泉に時過し居れば時鳥
涼しさや温泉の灯消えたる山嵐
すみ渡る温泉で嗽ひすや明易き
鄙の温泉や濡身を納の刺しに来る

東山 八句

温泉女が居て古き宿なり合歡の花
繪團扇や温泉土産の昔振
ざふくと温泉が溢れ居て明易き
宿の前芭蕉玉巻て湯女を見る

短夜や青樓に温泉の湧く處
温泉に遠く川上に來つ時鳥
灯取蟲温泉槽を泳ぐ虻蛄のあり
湯帷子似合ひしものを別れかな

飯坂 三句

涼しさや温泉の七景に十綱橋
馬の子が温泉の町あるく涼しさよ
湯治人瓜提灯をともしけり

穴原 三句

鮎掛も摺上川や湯治人
涼しさや湯治の人のぎぎう突き

干鮎やつましく暮す長湯治

(明治三十六年)

秋
之
部

時 候

立 秋 今朝の秋千里の馬を相しけり

曇れども蒸さず秋立つ日なりけり

よはくと癩疹過ぎての秋ぞ立つ

秋立つや子安詣での花の東

海防の巡邏ありけり今朝の秋

悼 木 外

諏訪の水ハタと落ちたり秋立つて

初 秋 初秋や入鹿も見えて鷗飛ぶ

残暑 馬市に祭控へて残暑かな

朝寒 水汲の男来て居る朝寒み

川舟の眞帆の高さや朝寒み

鹽原

温泉烟の朝の寒さや家鴨鳴く

山中に淹留し朝を寒うしぬ

藁積めば朝寒き里の冬に似る

大橋に何の人出や朝寒き

肌寒 夜半に著く船を上るや肌寒み

うそ寒 うそ寒み車賣らるゝ途中かな

冷か 冷やかや水走井に影見えて

ひやくくとゐて樂めど妻子かな

ひやくと積木が上に海見ゆる

繪表の團扇すてけりひやくと

黄なる花冷やかに竹緑なり

秋冷の句作同人旺盛なり

雲巖寺

冷やかに十境三井の名所かな

冷やかや今の身思ふ御目ざと
花鳥捨てし墨畫の氣品冷やかなり
三日雨ひやくと牀上げもして
日記にすたまさかの紋景冷やかに

秋晴

烟吐く船許りなり秋晴るゝ
秋日和舊友會の野外かな
絶えてせぬ艾もみけり秋日和
近作を畫室に掛くる秋日影
秋晴れて霞より高き黍見ゆる

鹽原

秋日和狂ふ那須山嵐かな
送別の爆竹鳴るや秋晴れて
行くべかりし舟游思ふ秋の晴
天下知る藏書見に來ぬ秋晴れて

百花羞に對す

死後の知己を生前に秋晴るゝなり
裸湯の人猿が見る秋晴れて

夜寒

小角力が風呂の下焚く夜寒かな
居風呂に二人入りこむ夜寒かな

鱗々として夜寒の車すぐるかな
夜を寒み人語聞えて森の寺

大 阪

やゝ廣き順慶町や夜寒の灯

鹽 原 二句

谷水の地底に鳴りて夜寒かな
下戸の黨膳を徹する夜寒かな
点滴と夜寒の釜の鳴る音と
思ひの外客ある山の夜寒かな

十軒病む平癒祈禱

俳魔して夜寒の病魔拂はせん

湖を見て夜越えになりし夜寒かな

鞠水館即事

寂然とをれど艶なる夜寒かな
春來んと言ひしをうたゝ夜寒かな
焼跡も夜寒の橋の出商ひ
夜を寒み伽すれば乞ふに讀む書あり
鮭網を思ふ最上の夜寒白

夜長
長き夜の水流れたり大井川

大 阪

町の名は宗右衛門夜は長右衛門

短尺を乞へり夜長にほとりして
下り二艘上り來ぬ夜の長さかな

鹽原

寐る時の湯浴靜かに夜長かな
火も置かず獨居の人と夜長かな

楚子、後槻布子を贈る

句を作る夜長に妻等縫ひにけん
刑書調べ禁足に及ぶ夜長の灯

秋暮

市中や鴉人を見る秋の暮
泣きやまぬ子に灯ともすや秋の暮

捕虜を見る人立薄し秋の暮

219

秋夕

一時晦冥の驛鈴明り秋夕
竿毘布に秋夕浪のしぶきなき
燭したためらふ暗誦の君の秋夕
我が朝寐汝が妻振りの秋夕
秋夕何婆娑と櫻欄に又藪に
藍の染まりに心荒ぶも秋夕

秋の夜

秋の夜の宿に白ひく響かな
秋の夜や學業語る親の前

218

秋の夜や能樂五十年を讀む

行秋や妙な實がなる園の草

暮秋毛馬塘秋訪ひぬれば果てにけり

輔踏む賑ひ過ぎて秋暮れぬ

住みつきて我句の秋も果てにけり

枯るゝ見ゆ洲押の松や暮の秋

九月盡腹げそと背もなき鮎や九月盡

勸進の九月盡氣比の海晴れて

冬近

短柴や冬を待つなる夜の蜘蛛

戻り荷の真帆の底雲冬近き

コスモスの冬近し人の猿袴

宿の主人も一筆を乞ふ即事

建て増しの槌かしましう冬鄰る

川口の塞がる冬も鄰りけり

天文

初嵐

ことし搔けば枯るゝ漆や初嵐

死ぬる馬と萩に見て立つや初嵐

庵の木瓜の實生りに枯れぬ初嵐

秋風

秋風や道に這ひ出づいもの蔓

蝸牛秋風殻を吹いて出でず

學問の稚子のすゝみや秋の風

追善の芝居幟や秋の風

雁鍋の訴訟哀れむ秋の風

閒庭

梅檀の實の三ッ又や秋の風

鹽原二句

秋風の温泉宿のさびれ懐かしき

重疊の山夕榮えぬ秋の風

祇園寺

秋風秋思松も唐様の名残かな

午後虚栗來る閒談

我を戀人といふ人淋し秋の風

果知らずの記のあとを來ぬ秋の風

秋風や去勢せし馬といふを見る

野分

手負猪萩に息つく野分かな
野分過ぎて水引の花伸びにけり
庭を埋む木の葉木の枝野分かな
ほこり立て、馬小走りに野分かな
抱き起す萩と吹かる、野分かな
畏なくて狐死にをる野分かな
我が柳野分せぬ間に伐りこくる
御佛に野分の朝の花挿しぬ
瓜垣のつぶれめでたき野分かな
大水を押し落したる野分かな

秋雨

野分にもめて萩の咲き出でし
鄰かけて大樹倒れし野分かな
雨打つて書窓に野分始まりぬ
山を出る日のくれぐれに野分かな
灯ともすや野分止む頃戻る猫
銀眞白牛賣りし夜の野分して
燭足りし頃を御堂の野分き初む
教へ子の家路の野分明日語る
滞陣や久しうなりて秋の雨
御下向關路の秋の雨に逢へり

秋時雨

かつたいに奇特の寺や秋の雨
秋雨や俵編む日の藁一駄
秋の雨笹青き上まの平かな
山潰えし又の噂や秋の雨
妻のいふ男不精や秋の雨
百姓の藪煮る頃や秋の雨
策一つ蛹捨てるや秋の雨
秋霖雨鑛滓何を彩りて
熟蕃の山伐る程や秋の雨
晴を鳴く鶯や足尾の秋時雨

秋の空

塔に上る暗きを出で、秋の空
幌武者の幌の淺黄や秋の空
山莊の眺望御記や秋の空
秋の空虎落の上を行く蜻蛉
浪に没す帆影の果や秋の空
舟橋に水見渡すや秋の空
三日泊りせしを上れり秋の空
便船す蝦夷路の島や秋の空
十州の兵旦暮に到る秋の空
岩出沒鳥交る瀬戸や秋の空

此處には湖舟多く繋がれり

門 被ひ疫絶えし後の秋の空

秋の雲

森の中に出水押し行く秋の雲
寶永は龍の爪出す秋の雲
見えぬ高根そなたぞと思ふ秋の雲
隔て住む心いひやりぬ秋の雲

稻妻

稻妻のすさまじうなる夜半かな
稻妻の赫として傘を透すべく
稻妻や旅して人のもどる夜に
斷食の水戀ふ夜半や稻光

風雲のときに稻妻しばくす

稻妻に萩の音さへ無かりけり
漸々と雲湧く方や稻妻す
長橋の水を照らすや稻光

露月に會す即事

十分に酔へる時稻妻の雨
海門を出れば稻妻左右よりす
稻妻や芝滑らかに牧場雨

天の川

蟲追ひの籜の空や天の川
三津の濱や浪も立たなく天の川

露次に住んで天の川見ゆ駿河臺
静かさや燈臺の灯と天の川

星月夜

濠深き城のかためや星月夜
神に近き宇治橋に出て星月夜
瓦燈口あかき見ゆるや星月夜
偵船のかゝれる沖や星月夜
星月夜狼火にあらぬ稻妻す
漁火の小門も過ぎけり星月夜
我庭や椎の覆へる星月夜

盆の月

町に出ても白楊高し盆の月

三日月

三日月や野路を戻る稻の露

三日月に淋しきものや舟よばひ
ひもろぎの筵の露や三日の月
藻を搔いて暮るゝ蛸あり三日の月
彼誰の女に逢ふや三日の月
糧を乗せてひそかなる舟や三日の月
三日月に川一筋や新墾田
佐渡の句の三日月の繪にかゝれけり
巡錫の徒步に在すや三日の月

月
名月
無月見月

貝掘りの戻る濡身や三日の月
横長う薄れ行く雲や三日の月
三日月や島とも見えて男鹿の山
明月のともし火遠し由井ヶ濱
客を牽いて夜半に歸るや月の門
愚庵嘯月壇
物干に月一痕の夜半かな
漕ぎ出でゝ月見の船や湖半
月の雨静かに雨を聞く夜かな
豁然と廣場になりし月見かな

公園の月や夜鳥かすれ鳴く
市の月十字の巷過ぎ行きぬ
急がしき雲ののきやうや雨後の月
撃柝の四門に起る月の雲
名月や一郭をなす坊十二
誰人か月下に鞠の遊びかな
狼火待つ寄手の月の後陣かな
碧童庵即事 二句
月のよきに主は何で籠り居る
薬ねつて主は月に背きけり
素謠の清經の曲よの月夜かな

誰來ます局の月の薄くもり
月前に高き烟や市の空
縦列の首尾呼びかはす月夜かな
一つ家の月枯枝にかゝりけり
堀止めの運河の月や通ふ汐
底を鳴る海の早瀬の月夜かな
穂芒の上飛ぶ月の狐かな
船手より宮島撃ちの無月かな
横に刷く雲の旗手の月夜かな
大阪新報祝

筆陣の野も鼎立の月の秋

要害臺眞上の月になりけり

西山々莊

月見るも斯君斯老の二人かな

漁人けふ愛兒を亡ふ由聞ゆ

月見ても泣くまいくが親心
引きとめし君に無月を恨みなん
飲み水を運ぶ月夜の漁村かな
川越えて海邊の月に寒がりぬ

安積中學校運動會五句の中

五十鈴湖畔の名月といふ遊びかな

留別

月に會す芋につまりし咽明いて
水の月川原祓ひのありし夜や

後の月

荒削り羯摩が鬼の十三夜
任地去る人の妻子や後の月
水塚の荒村の夜や後の月
片々の落ちし扇や後の月
町筋のはすになり行く後の月
松こけて起しもやらず後の月
後の月 靱磨白を壊ちけり

霧

淋し寒し出羽の清水後の月
こたび上ればまた上らぬや後の月
主振り茶も設けゝり後の月
出でゝ伏水船まだあるや後の月
隠栖は成りしかど短命や後の月
昔ならば不玉が宿や後の月
假橋の都四條や後の月
霧こめて恵心寺見えぬ朝かな
川霧に龍の流るゝ後かな
奇しきまで夜霧深しや燭を前

燈臺のともる湊や霧の中
樓門に幕打つて霧の晴るゝなり
海樓の松薄霧に残る月
霧立つや大沼近き宮柱
出て見るや龍燈壇の夜半の霧
霧晴れて日のさす程や汐烟
磬梯を霧こめて暮色大いなり
足もとにヒヨコ來鳴くや霧の中
師をおうて霧晴るゝ大河渡らばや
異なる山の様見る霧晴れて
神業の晴れずの霧や山の湖

鳥海山頂木社の宮司某氏一句を乞ふ

雲霧や風は神よばひしてや鳴る
白割れしけふとさも霧晴るゝ頃
屯解く焚火もあだに霧下りて
霧下りし干し物に思ふ湖津浪

天橋眺望

霧晴るゝ松毎に又た波毎に

露

白露や葎の中の立佛
學校に行く子は露の徑かな
舟に居て江尻の夜明露ぞ降る

露深しなほ青々と猿いばら
ほの明けに花白き木や露の原
伐り伏せし森見通しや露の原
霧晴れて川沿ひ露の寒さかな
露深き草の中來ぬ塔の下
底芝に芙蓉咲くなり露の中
雑草に南瓜の花や露の中
樟の露吹拂ふ夜半の嵐かな
高黍の野路になりけり露の降る
花火の夜露けき筵敷にけり
藁覆ふ藻塚匂ふや露の中

だんだらの尾の鳥飛べり露の原
露の草石埋まりしこのあたり
脚高き木々の立てるや露の原
一二本露の茵や陣場山

羽前立石寺

水菊の花や慈覺の露の降る
露に來て繪天井見る小寺かな
祀絶えしを露の營みしたりけり
金櫃行く守兵戦話や露寒に

白山温泉

山谷めせし膝皿や露しとと

山房の夕露や楡の沙明り

露時雨

心澄む高野の道や露時雨

剃刀をいたゞきに行く露時雨

八十神の御裳裾川や露時雨

地理

秋の山

隠々として秋の山鳴ることを知る

頂に湖水ありといふ秋の山

墓と見えて十字架立つる秋の山

牧人の日出づる方や秋の山

人、岩の高きに見ゆる秋の山

前聯の大澤後聯の秋の山

遠のきし雲夕榮えす秋の山

雲こめし中や雨降る秋の山

酒村さす緑林の徒や秋の山

秋の水

藻を刈りて泥流れ去りつ秋の水
山の北白き石出づ秋の秋
塞がらぬ借家の庭や秋の水
秋の水冷々として鐘の下
揖斐よりも長良瘦せけり秋の水

初潮

碁布の鳥初潮浪を上ぐるかな
港つくる高濱に潮の初めかな
初潮や兵船泛ぶ兵十萬

花野

川上の水静かなる花野かな
芒絶えて茅の穂交りに花野かな
芒谷下りて果なき花野かな
芭蕉といへば曾良を忘れぬ花野かな
領境牧場も置かず花野かな

落し水

知足亭晩望の句や落し水
落し水一畝畔を缺ぎにけり
水落す日待日和や小百姓
川筋に落つる田鮒や落し水

刈田 さびれたる會津見て過ぐ刈田かな
裸火に大衆名残や刈田踏む

人事

七夕 人を待つ舊七夕の夜になりぬ
妹が帯たれてうつくし星迎
石を積む風除けに七夕竹見ゆる

高きるに上 高きるに上る怡々として父老かな
絹光る袖や高きるに上りけり
懐抱を高きるに上り語りけり

燈籠 京淋し燈籠買ひに此夕

川沿ひの燈籠も見えて淀の窗
庭暗し燈籠に物ぞ襲ふ思ひ
大船の舳に魂を呼ぶ燈籠かな
この海の供養にとす燈籠かな
閒談の燈籠の灯の細りけり
夜仕舞の店に残れる燈籠かな
燈籠のなき家の又た小淋しき
燈籠や我知る惜しき二少年
家居ある昔の原や高燈籠
山寺の篋照る離れ燈籠哉
國主よりも水の供養の燈籠かな

燈籠や客死の魂を我宿に
巡錫を燈籠に迎へ申すなり

墓 參 檀寺の墓にも參るゆかりかな
むら薄似し墓あるに詣りけり
草ぬいて早暮るゝ日の墓參かな
墓 參 不肖を叱り給ひけり

大文字
大文字や北山道の草の原
門跡に我も端居や大文字
大文字のある夜を三井の燈籠かな

大文字や尾の火の残るちよろくと

攝待

南瓜煮て攝待したる木鉢かな
攝待にくたれし衣の聖かな
藤豆の下がれる宿の門茶かな

踊

不調子に踊つて居るよ小さい子
絶えずしも輪にまはりゆく踊かな
月出でて鬼もあらはに踊かな

三井詣

大津繪の店の灯や三井詣

舟でつく人ほのめくや三井詣
花をさす裸佛や三井詣

鬼貫忌

惟然が句あら鬼貫の忌日やな
やしやら孫残りて富めり鬼貫忌
鬼貫忌心ひそかに面白し
鬼貫忌を營めど鬼貫喜ばず

去來忌

去來忌に卯七のことも忘れずよ

太祇忌

太祇こゝに住めりとぞいふ忌を修す

子規忌

かりそめに句をよみすてす糸瓜の日
天下の句見まもりおはす忌日かな
後れ参る夕日の中や子規庵忌

扇置

忘れ置きてお山花壓す扇あり
在家泊りせしを歸山や扇置く
扇置くや富みて奴僕に恥づること
御判扇かほど朱摺れや秋じゆり
硯得しに君待つて扇置く心
扇置けば芝生柳葉黄を點ず

團扇置

置き重ぬ蘆邊眞白の團扇かな

新酒

この願ひ新酒の升目寛うせよ
草の戸に辰馬が新酒匂ひけり
爐の側に信夫女と新酒かな

子規居士の舊事を偲ぶ

故人こゝに在りし遺物と新酒かな
新走頼む人もなく酔へる
新酒店紫苑が下の貝白し
勢田の句と乞はるれど如是に膳所新酒

濁酒

どふろくの境涯發句の天下かな
貧の鬚伸びて濁酒を酌みにけり
どぶろくのあるじを以て我れ居らん
師在らばと思ひ泣く夜の濁酒哉
交りをかへまじき濁酒酌みにけり

柚味噌

柚味噌會そも十年の昔かな
話頭柚味噌に及べば主經營す
いつもいひて柚味噌の傳授未だなり
君を壽す私の酒の柚味噌かな

澀搗

あらぬ蓋を柚釜にとりし魔刀かな
大饗のきのふ忘れて柚味噌かな
取りも入れず五倍子干す宿の柚味噌かな

澀粕や古りて用なき桑の下
猿に似るモンペ穿きけり澀を搗く
澀の杵置くともなしに戸口かな

新蕎麥

新蕎麥を打つ一棒のたはれかな
新蕎麥や主の詩集把栗寺
貧の友娶る一人や蕎麥の秋

新蕎麥に句に酒に論に責めらるゝ
蕎麥うつや月彷彿と靄の中
新蕎麥や碁筭なき盤も横はる
新蕎麥や殖林の山中の酒
新蕎麥や南部素郷と出羽五明

砧

小さい子砧しどろに打ちもやめず
砧うつ夜半を一人や庭の月
山に響き水に答へて砧かな
たはれ女の槌かくしたる砧かな

巻き置ける搦衣や白し晝の宿
狹賓の賦晩砧の詩を誦す
眼の前に蕎麥白き夜の砧かな
打ちつゝ、打はづす砧夜頃かな

鹽 原

カルサンの女が打つや藁砧
蝕める機もあり古き砧かな
再游の宿も同じき砧かな
豪家なるジョンバの砧また聞かん

相 撲

夜角力や露けき土の灯のうつり

負力士鬚士に汚れけり
引き分けて鼻血わりなき角力かな
夜紛れに芒をつかむ相撲かな
小相撲やかくても師の名をしみけり
花薄歸參かなはぬ相撲かな
纏頭を狐もしたり草相撲
押され住みて渡り力士に遺恨ある
相撲乗せし便船のなど時化となり
國産も泊めし力士に綺榮えて
箱根越えて一二の相撲指折りぬ
水鏡力士と契る事のあり

花火

淀の關の花火や天の一方に
稻妻の光る花火の絶間かな
残る火をたのみ心の花火かな
遠花火音して何もなかりけり
海の月花火彩る美しくしき
洲に渡り隈なき花火仰ぎけり
游船の舳に艫に芒花火かな

海蔵打

海蔵打や十五の大人交りをる

與太郎に示す

虎の子の海贏を汝が袂かな

秋の蚊帳

船宿にしばしまる寝や秋の蚊帳
たゝますにくるめ置きしが秋の蚊帳
蚊帳の果妻亡き君に思ひ走す
薬やめしも蚊帳の別れの二三日
君等我等机定めつ蚊帳の果
鼠入りし蚊帳モ、シヤグリ果てにけり
櫛の遠音雁かとも蚊帳果てし夜や
串魚にまつはりし蚊帳も別れかな

行水名残

癡病みし人も行水名残かな
五位鳴いてそゞろ行水名残かな
行水の名残の背や十月月
行水の名残の芭蕉破れたり

案山子

朝々や案山子に山の雲來る
我笠と我蓑を著せて案山子かな
小藩分立由利一郡の案山子かな
女米鬼田の教化に浴す案山子哉
案山子より訴狀届きし田主哉

鳴子

澤の上繩引きたるゝ鳴子かな
鷹のとぶ午や鳴子のしづかなる
學僧の往來の道の鳴子かな

職掌不相犯

白ひきの鳴子の事はしらぬなり
樽さげて聲が行きやるを鳴る鳴子
芋煮えて天地靜かに鳴子かな
馬遠く鳥高き野の鳴子かな

添水

楮山蕎麥白き中に添水かな
紙を漉く里に音ある添水かな

引板

ぎいと鳴る三つの添水の遅速かな
寺の牀人の踏むよに添水かな
温泉の里の捨湯も落て添水かな

何鳥の嘴叩くらん引板の音

稻刈

道端に刈上げて稻のよごれたる
水害のまだ青い稻を刈つて居る
稻刈るや田舟押し入るゝ泥深み
刈るに憂き泥田の稻の瘦せたりし
一の鎌御田の稻にすゝめけり

稻刈つて鶴の首見ゆる餌飼かな
刈束のしとゞ田舟に穂垂れかな

掛 稻 掛稻のつぶれも見えて川原かな

掛 稻 に蓮花かゝるや法隆寺
掛 稻 や家三四犬潜り出づ

稻 筵 稻 筵 日も入方の雲の峰

扱 摺 扱すりの月になるまで音すなり

新 米 人 丸 も 五 穀 の 神 と 今 年 米

大 根 蒔 大 根 蒔 く 日 よ り 鴉 を 憎 み け り

崩 れ 梁 米 を 搗 く 舟 も す さ ま じ 崩 れ 梁

橋 の 下 も 梁 の 崩 れ の 見 ゆ る な り
簀 筵 の 残 る 方 な き 梁 木 かな

鹿 垣 鹿 垣 や 山 尙 墾 く 蕎 麥 畑

漆 搔 谷 深 う ま こ と 一 人 や 漆 搔

新 棉

枝々の細きも漆かきにけり
翁住んで壺に漆を干しにけり
飛驒山に蕎麥の白さや漆搔
古桑に交る漆も搔きにけり
漆かく山に通草の赤きかな
漆かく哀れを百舌鳥の叫びけり
漆搔いて夕日さしけり山の池
諸爪のよに搔き捨てし漆かな
日は斜木棉とるべき野面かな
棉くはぬ古びゆかしき手ぐりかな

掛 烟 草

綿の木にしぐれかけたり娶そしり
藁を打つ音に異なる棉車

千振りの束の一つや掛烟草
窓高き梁の日影や掛烟草
烟草干す下に破れ箕のつぐね哉
大方のことし蟲葉の烟草かな

猿 酒

松桂の雨蘭菊の露や猿の酒
猿酒や爐灰に埋む壺の底

鯉漬

酒拭くに鯉の粟のこぼれかな
菊おそき宿にめづるや鯉漬
自炊子に酒の時ある鯉かな

鹿笛

村近く鹿笛吹いて過ぐるかな

初獵

鳴走る田水獵期の初めかな
初獵の江を離れずよ晴るゝ日は
初獵や威しの銃と知る山邊

動物

鹿

疾く起きて鹿に出で逢ふ戸口かな
鹿に與ふ煎餅を買ふ旅心
村近く鹿の出で啼く端山かな
晝過や鳥居の前に鹿二つ
露深し胸毛の濡るゝ朝の鹿
老と見ゆる鹿が鳴きけりまのあたり
手向山の紅葉に鹿を愛すかな
祭の灯あかきに鹿の遠音かな

奈良

雁

鹿むれて出づる野分の且かな
山房の著作すゝむや鹿の聲
鹿奔も雪早き年の刈田かな
鹿を呼ぶ頃の汐照り神風ぎに
母衣かけて車に雁を聞く夜かな
海近く雁の下り居る田の面かな
仁和寺の門田に雁のおつるなり
園の菊葉廣に雁の糞白し
森蔭になり行く雁の鳴音かな
番雁の刈藻にすべる岸邊かな

いや高うなりまさる雁や湖の空
雁あさる嘴のよごれや蘆の花
稻村に番雁人を寄せぬなり
雁鳴くや海見ゆる窗を閉しゐて

有磯吟社の爲めに

布勢の湖跡あれば雁も来るやらん
八五原や櫛木干す雁のすれぐに
渡る雁水光る木の閒月を行く
網干杭埒かとも雁下りてをり
常宮神社即事
海に泛ぶかと拜殿に雁仰ぐ

渡り鳥

門裸な家となり雁下りる沼
雁見れば撃井のことも浦日和
市まどひせしに城見ゆ渡る雁
群鳥の木々飛かはし渡るなり
づくくと鳴く小鳥来る梢かな
大風に傷みし樹々や渡り鳥
雲早き空になりけり鳥渡る
鳥渡る博物館の林かな
多度山の低き彼方や渡り鳥
椎拾ふ子の朝早し渡り鳥

夜晴れせし日のきらくや渡り鳥
遅速なき稲の穂波や渡り鳥
表のぼりする山裾や渡り鳥
渡り鳥安積風にきらくす
駒糶りの物のきほひや渡り鳥
山入口朴の葉風や渡り鳥
二本づゝ祭幟や渡り鳥
小鳥来て嘴黒見せぬ藁庇
伊藤氏別墅即景
鳥海を肩ぬぎし雲や渡り鳥
岬めぐりして知るや鳥の渡り筋

この瀬埋めて彼の山開く渡り鳥

啄木鳥 啄木鳥や山下り勝の庵の主

鶉 鶉鳴く木幡の里の後家一人

蕙苴の高きが下の鶉かな

穂の高き黍に鶉の飛び立ちぬ

畑人の箕にすくひなん鶉かな

ちよろ／＼として見えすなりたる鶉かな

鳴 銃の音鳴と小鳥と立ちにけり

鳴打ちの畑飛びけり江の日和

探題晝

高黍の穂立月淡く鳴遠し

百舌鳥

散りすさぶ雑木紅葉や百舌鳥を賣る

百舌鳥鳴くや醍醐の道の菊の村

山の邊に豆干す上や百舌鳥の聲

百舌鳥鳴くや大河を前に日中す

疾く刈りて掛けし一田や百舌鳥の聲

家處々に百舌鳥木移りし高鳴きす

葉白く變る草あり百舌鳥の贅

片目開いて人囀む百舌鳥の囀かな
山寨の道到り難し里の百舌鳥
百舌鳥鳴くや兵船用ゆこの渡り
この酒屋辛き量りを百舌鳥の鳴く
草高に飛ぶ百舌鳥贅を挿すやらん

歸燕

店先や燕歸りて小淋しき
いぶしたる爐上の燕歸りけり
湖のしぐれに歸る燕かな
養生に残らにやならぬ行く燕
北をさす舟の行衛や去ぬ燕

去ぬ燕この家の冬の厄知れり
藁や打つ白尻立てぬ去ぬ燕
燕去んで蘆葦雁影に静かなる
曝書すみし便りに燕去ぬとあり
燕去んで部屋くともす夜となり

棕鳥
棕鳥の來る梅檀や里の坊

眼白
青山の淺きに眼白高音かな
眼白掛けて日まはり高き小家かな
眼白來る頃庭畑の青菜かな

鵜

門高き木の間や鵜の鳴き移る

鱸

浦人やうろくづ寒き鱸より
書に親めば鱸を料る日多し
山を出て島に渡れば鱸哉

鱈

鱈の飛ぶ夕潮の眞ッ平かな
建網の十日の月や鱈の飛ぶ
鱈の飛ぶ江尻の潮の高さかな
鱈飛んで船の往來も杜絶えけり

鱈

夕榮えの雲の眞下や鱈のとぶ
焚き釜のあたりもこぼれ鱈かな
汐焚くと鱈引くとや須磨の蟹
網際のこぼれの鱈浪の打つ
鱈引く外浦に出るや芒山

落

鮎

句劣る蕪村拾遺や秋の鮎
鮎落ちぬ草庵の硯凹みけり
鮎落ちて久世の渡しの人疎し
鮎落ちて茅萱もみづる河原かな

よき歌も言ひ古されぬ秋の鮎
澀鮎や石拂ひしに出水して
鼻曲る鱒も見て鮎さびにけり
落鮎や誠めど筆の荒ふ頃

江 鮎 貢せぬ國ぞ淋びしき江鮎

堅田より翁の文や江鮎
源五郎鮎四郎三郎江鮎

沙 魚 友沙魚のつぎ食ふ潮になりにけり

沙魚釣や真帆の大船まのあたり

沙魚を干す軒に蘆の穂届きけり
沙魚釣や揺るゝ傘帆の波や汲む

蛸 面白う聞けば蛸夕日かな

蛸や兵村にある牛牧場
蛸や道程を聞く二里三里
蛸や浦人知らぬ崖崩れ
蛸や遺髪を守りて戻る人
蛸や日に一頭の蹄鐵師

蟲 晝の蟲寺は淋しく明放ち

當座の句みなよみ出でぬ蟲のこゑ
蘆の穂に池の水蟲鳴く夜かな
夜詣の月になりけり蟲の聲
蟲のこゑひやくと水を住む夜かな

骨立舎

鳴きやまぬ蟲に句作の遅速かな

鹽原

温泉烟に灯ほのかや蟲の聲
蟲の句を案ずる旅の恙かな
夜ながら盥すゝぎや蟲の聲
石段の高きのほりぬ蟲の聲

蟲籠晝いて萩の枝折戸添へばやな
魔がさすといふ野日高しちゝる蟲
蟲鳴くや庵の樹と見ゆ寺の杉
木の葉そよぐ月代も見ゆ蟲の聲

蟲選
蟲合

蟲選 古江の月の傾きぬ
蟲選 や芒の中のたゞずまる
蟲選 や灯にかざし見る籠の中
鳴き絶ゆる蟲もあるらん蟲合
蟲合 よき蟲持つて参りたる
美しくしき籠もめでたし蟲合

蟲合あはさぬ蟲のかしましき

蜻蛉

赤阪も田舎になりて蜻蛉かな
蜻蛉や西日静かに稲筵
蜻蛉や日限り地藏の八つ下り
蜻蛉や線香干して鳥羽の里
兵營の前廣々と蜻蛉かな
桑畑の草刈らずあり飛ぶ蜻蛉
雨に泊れば雨は晴れたる蜻蛉かな
逆潮の江に夕空の蜻蛉かな

岩代二本松

赤蜻蛉

丘隔つ町二筋の蜻蛉かな
待つ人に裾野にあへり夕蜻蛉
飛ぶ蜻蛉亡き子二人を漁翁かな
舟遊ぶ飛彈古川や夕蜻蛉
日和山の夕蜻蛉海は鏡哉
紅毛の帆船著きけり飛ぶ蜻蛉
酒巻法旅連れのしつ飛ぶ蜻蛉
飛彈人の天領顔や飛ぶ蜻蛉
から松は淋しき木なり赤蜻蛉
むれ立ちて穂の飛ぶ草や赤蜻蛉

櫻ボクに伐りし芽ふくや赤蜻蛉

蝨

水に落ちて泳ぎかしこき蝨かな
蝨焼いて夕べにくれる翁かな
蝨飛ぶ草に蟻螂じつとして
田鼠の鳴く音も蝨静まれば
田一枚濱松垂れて飛ぶ蝨
蝨とる老を見ぬ日のつもりけり
金魚居るに柿の下水蝨落つ

蟻螂

蟻螂のほむらさめたる芙蓉かな

蟻螂や我行く道に現はるゝ

蓑蟲

蓑蟲を養ふの記のあるじかな
蓑蟲や五倍子干す宿の軒場より
蓑蟲の木瓜は枯木になりけり
蓑蟲のあらはに櫻欄の折葉かな

蚯蚓鳴

垣をあらみ蚯蚓鳴くなり隣の灯
蚯蚓鳴いて夜半の月落つ手洗鉢

秋の蠅

尚生きて生ぐさきものに秋の蠅

初七日うし二七日淋し秋の蠅

秋の蚊

残る蚊もはたとなき夜や燭の風
残る蚊の晝の明さを飛びにけり
尙残る蚊にたまさかの君を宿す
大いなる蚊のまざくと生き残る
庭木刈りて蚊も居らぬきのふけふの月
藪を積む後ろより残る蚊の出づる

秋の螢

伐残す帯木に秋の螢かな

雀蛤となる

雀蛤となるべきちぎりもぎりかな

植 物

木犀に薪積みけり二尊院

木犀に桃葉桃英の發句かな

木犀の匂ふや詩書の二三帙

木犀の下木蓮の落葉かな

木犀や北寮に落第の君

常陸西山々莊

木犀や隱栖に國事聞ゆ時

紅葉 神前の紅葉ぬれけり明の雨

愚庵錦楓崖

僧僧を送り出て紅葉夕日なり

紅葉摺うつや高雄の這入口

蘆高う隔てゝ里の紅葉かな

城山の蹴落しの谷や夕紅葉

醍醐邊川水を照る紅葉かな

角枝の火木に燃ゆる紅葉かな

石を焚く里に宮居の紅葉かな

鹿柴に何の烟やむら紅葉

鹽原十四句

烟墜く遠き木ぬれの紅葉かな

奇岩出づ天狗の鼻の紅葉かな
山姫の岩も鐫りけんむら紅葉
猿茶屋に大枝挿せし紅葉かな
檻の前猿が散らせし紅葉かな
温泉の神の幟も赤しむら紅葉
轆轤挽く家や紅葉を鉢に植う
棚田見えて紅葉に遠き處かな
黒木積んで紅葉が中や一軒家
裸湯に斜日の紅葉映じけり
水に漱ぎ湯に枕して紅葉かな
丸盆の木目は紅葉重ねかな

貝石に紅葉とりちらす土産かな
桑植ゑて紅葉のことは知らぬなり
山紅葉縣の牧場通りけり
阿賀川も紅葉も下に見ゆるなり
裏山のけむれる此方紅葉かな

最上川仙人澤

檜山と峙して満山紅葉かな

本合海即景

楸形の流れに星座紅葉かな

羽黒山

谷深し松に紅葉を疊みけり

汪洋館即事

瀑を下に閒伐りせし谷紅葉かな
峰渡りの足溜り一寺紅葉かな

櫨紅葉

沼べりに杉の並木や櫨紅葉
濠通す城山裾や櫨紅葉

鹽原二句

もみづるや平家の寺の櫨一木

紅白膠葉木

朴落葉ぬるで紅葉の谷閒かな

櫻紅葉

櫻紅葉なるべし峰に社見ゆ

柿紅葉

落合のほとりの村や柿紅葉
屋根見ゆる凹地の寺や柿紅葉
木の閒より正倉院の柿紅葉
水近き櫨も色濃き柿紅葉
荒川の夕日水嵩や柿紅葉

虛靜庵即事

散紅葉

畑ひろし藏立つあたり散る紅葉

散柳

柳散つて料理も淋し忍川
ひゝらぎの枯葉も落つる散る柳

瀟湘の柳散るなり雁の糞
柳散る石文のあり飛鳥山
散る柳古簾かけたる家居哉
散る柳塔の供養も過ぎにけり
柳散つて鐵柵立てる札所かな
灰捨てし芥の上や散る柳
菊を一部にして厩あり散る柳
咲き絶えし薔薇寄せあるに散る柳
種馬の年やつれにや散る柳
散る柳臼をはむ蟲は蜈蚣哉
柳散るや馬と異なる牛の瘦

梨

十日路の海渡り來ぬ梨の味
乳牛を牧する里や梨の味
水たる、梨兄弟に分ちけり
梨賣も出るや平沙の通ひ路
温泉泊りの端米と梨を買ふ日かな
寺のある川隈銀杏黄ばみ見ゆ
梓弓比企が谷の銀杏黄なるかな
銀杏大樹黄落す天下たゞ二代
宇治橋を釣殿の道や銀杏ちる

銀杏黄葉

柘榴 裏町に住んで柘榴の一木かな

梅檀の實 梅檀の實を食ひこぼす鴉かな

木の實 境内に木の實拾ふや椎柏

木の實採通草は食うてしまひけり
木の實拾ふ子等の練武や長曾我部
簀子縁童子の木の實置去りぬ

奈良

日うらゝ木の實はさかる鹿の爪
木の實落ちて山踏の僧過ぎにけり

柿
柿秋

掌上に天果と見ゆる木の實哉
洞ろ木に猿の溜めたる木の實かな
少年の木の實のホ匂に振ひけり
梅裸木添ふ芭蕉にも椎拾ふ

宇和島天教園即事

藤二棚末枯れて木の實散るしきり

柿はちぎり棗は多く拾ひけり

祝「車百合」發刊

御祝に澁柿やるか芋やるか
澁柿の落つる厩のうしろかな

山圍む歸臥の天地や柿の秋
戦さより歸るともいふ柿の秋
柿秋や紙干す里の紙砧

某林務官に示す

山路の倒れ木もなき柿の秋
老の詩の綴りくづしや柿の秋

骨立舎

磊落な句と思へども柿の核
柿の題三十餘人澀を吐く
柿賣も湯女が往來につれ歌や
柿の村城遠巻の藪も見ゆ

栗

送るべき干鮎を柿に思ひ出づ

山里や神輿も昇いて栗祭
圓卓や栗飯に呼ぶ弟あり
栗焼いて渡世とす南大門の市
いつの栗蓋もしあえず硯箱
俵栗軍さの糧に藏めけり
毬栗の檜皮にかゝる社かな
栗綴る妹見ればあかき行燈かな

彌五郎阪を越ゆ

阪を下りて左右に藪あり栗落つる

此庭や芝こまやかに栗干しぬ
等躬が三巻と栗二升かな
蟲食ひのつきずあるなり二升栗
さゝやかな鑛山あるや栗拾ひ
牧原の隅通ひ路や栗拾ひ
春をいふ瀑の櫻や栗拾ひ

桐兎に與ふ

三つ栗の其落栗の一つかや
栗贈るに馴れしも真綿送る年
苔ほぐれ鳥搔き岩あり栗拾ひ
干納む栗も繭國圍爐裏國

露月居にて

桃の實 居る 三日 三千年や桃の味

柚 蠅帳に今あるものや柚二つ
黒木積む家や後ろの柚の高き
釜敷に釜なし柚子の置き處
尼寺の柚子累々と黄なりけり
柚子の秋家の古桑あはれなり

木 槿 墓多き小寺の垣や花木槿
木槿咲いて祭も過ぎぬ野の小家

黒谷の裏道過ぐる木槿かな
稲村の中に地藏の木槿かな
木槿さく畑の徑や木幡山
梅古く木槿咲くなり藤の森
捨飼ひに牛肥ゆる里の木槿かな
七浦の祭の木槿咲きにけり
鳥居ある漁村の沙に木槿かな
貝殻の道と聞き来て木槿かな
松大樹ある學校や木槿垣
清澄を越え來し里や花木槿
草刈れば木槿花咲く草場かな

萩

寺あれば池ある里や花木槿

人力や寺に引き入るゝ萩の花
山萩の馬にくはれてまばらなり
萩の中に馬つなぐ寺の首途かな
小萩女萩根岸の里の女の子
三日月や此頃萩の咲きこぼれ

大阪鶴の茶屋、萩の寺四句

小女は萩の徑を通ひけり
臥し茂る萩を束ねつ草を刈る
料理屋の温泉もありて萩の花

萩多き寺もありてふ在所かな
萩を起す野分の朝や庭掃除
たゞに萩を植ゑて人住む根岸かな
萩踏んで閣の石徑上りけり
萍に萩のこぼれや里の池
晴々と萩憐むや天龍寺
茶畑の萩見つゝ來ぬ梅の宮
出離れて萩見ゆるなり野路の家

成東入道山

松深く萩の徑の盡きすある
垣の外に埋めぬ池あり萩垂れて

頼むよしを女上せぬ萩の宿

愛媛新報二十年祝

萩十束芒十束を插さばやな
萩もしるき野鳩野雞や山耕地

芭蕉

古里に唐門あるや芭蕉寺
手届く芭蕉に遊ぶ童子かな
北山に大寺ありて芭蕉かな
たゞみ合ひゆれ合ふ廣葉芭蕉哉
むら萩の芭蕉埋むや百花園
不離不即の處に庵の芭蕉かな

宿乞ひし寺や芭蕉に目覺めけり
王はあれど熟蕃の族や芭蕉村

破芭蕉

裏門の塾にやれ葉の芭蕉かな

芙蓉

晝過ぎつ芙蓉の下に雞すくむ
かたみぞと芙蓉に寒し箱のもの
帚木は皆伐られけり芙蓉咲く
人住んで城址存す芙蓉かな
草とつて芙蓉明らかなりにけり
詩ありや芙蓉を前に人立てる

紅蜀葵芙蓉の花の姉ぢやとよ
關寺の垣に咲きそふ芙蓉かな

水戸好文亭

杏の跡芙蓉の下に印すらん

須賀川にて田善の遺物を見る

芙蓉咲いて下圖なりけり亞歐堂
天神の梅落葉芙蓉新たなる
城石垣一片移す庭芙蓉

破空に對し、波空と改む

紅芙蓉
紅芙蓉 始めて美少年を見る

菊

争ひは白菊わかつ黄菊かな

天長節

團欒や民喜びの菊の酒

愚庵採菊籙

菊一籬こゝに愚庵十二勝を成す

菊賣りに來るうれしさや勝手口

菊つくる門前の家や法隆寺

小菊二把さげて智月の姿かな

人老いて菊に背磨る日向ぼこ

鹽原二句

一部落那須野の菊の瘦せにけり

關跡に木挽が家や菊の花

未だ山を離れず菊を作る里

香墨辯護士になりぬとたよりす

蘭と菊あるじの事をさゝやかん

米澤市中即事

山桑の木高さや菊も作り捨つ

桑を梨を獎め作るや菊の村

峨々温泉にて

菊の日を雪に忘れずの温泉となりぬ

三菊の名ある縣の一長者

僧の招き我を致せし菊見かな

關跡に地藏据ゑけり菊の秋

梅嫌 古里の先生の軸や梅嫌

芒

この道の富士になり行く芒かな
鹿の糞累々として花芒
同門の葬儀に參る薄かな
沼尻の葭に薄に穂並かな
穂芒に椶櫚一叢や山社
川に沿うて上る山路や花芒
先生に馬を勧むる芒かな

挿しあるを流人のよみし薄かな
江の島に茫々として芒かな
ほちくと葭も芒も蓼の穂も
秋海棠蔓りて芒無かりけり
果なしの野に立つ薄日暮れたり
半日の閑野の芒見て歸る

東湖墓

おくつきに薄こそあれ杉の關
芭蕉の外朝鮮松と芒かな
鳥居ある方に上れば薄かな
遊女屋のありて舟つく花芒

志士祭る 今月今日の芒かな
里つゞき 松と芒に家居かな
九面は芒の里やむらくと
關跡に近き里なり 花芒
梧村居
山に多き笹は植ゑずて芒かな
水筋の横瀬に落つやむら芒
牽く見れば馬買はまくす花芒
熱鹽温泉即景
遊園に圍ひし山の芒かな
芒四方に高し澀とる家の空

海を隔てゝ見し方に來ぬ花芒
芒添へて豆の木掛けぬ風構
壇を築いて芒に松の在り所

棗

愚庵棗子逕
長い棗 圓い棗 も熟しけり

常山木

越後路のこの境川常山木かな

秋海棠

秋海棠に葉蘭つめたき風が吹く

鬼灯

來馴れたる鬼灯賣や遊女町

鬼灯に衣など著せて遊びけり
鬼灯や女學問はやりけり

朝顔

朝顔赤き花三千と數ふべし

朝顔の藍色は疾く咲かずなりぬ

朝顔のさかり絶えざる蕾かな

朝顔や野分も過ぎて花一つ

草庵

朝顔の出水をわたる鼠かな

桔梗

十哲の像と桔梗と芒かな

七つ塚あたり桔梗の多きかな
桔梗は畫卷の縦に畫さけり
芝青き中に咲き立つ桔梗かな
銀屏の前桔梗の插されけり
古松塙の十歩百歩に桔梗かな

紫苑

残るもの紫苑古りたり百花園
行きつくす京隅々の紫苑かな

女郎花

浅茅生や小路の中に女郎花
休らへば手折もぞする女郎花

うき旅のホ句聞かさばや女郎花

勿來關趾

松の外女郎花咲く山にして
女郎花束ねてや尙挿しそふる
短冊にももの書けとこそ女郎花

清澄寺

男郎花のみ咲く山と思ひけり

秋七艸 七艸や杉原紙に草の汁

曼珠沙華

木曾を出て伊吹日和や曼珠沙華
曼珠沙華咲き絶えぬなり旱雲
川沿ひや芒が中の曼珠沙華
須磨寺や松が根に咲く曼珠沙華
薬干す家に摘み來ぬ曼珠沙華
愁ひつゝ旅の日數や曼珠沙華
法窟の大破に泣くや曼珠沙華
稻村の堤の道や曼珠沙華
鶴脛庵にて
病む側に曼珠沙華折りて遊ぶ子よ

野菊

撫し子に往來日を経し野菊かな
豆引いてつれなく残る野菊かな
日待の日手折り持ち來る野菊かな
露草の榎が下の野菊かな

金澤

八景の道の別れに野菊かな
馬を見に行く野の芒野菊かな
憂さ晴れてそゞろに行けば野菊かな

雞頭

お長屋や黄に紅に雞頭花
借りる家の人まだ住みて雞頭花

雁來紅

雞頭に植込の松掘られけり
雨彼岸過ぎし物日の雞頭かな
雞頭に鼠出づ垣つぶれして
雞頭や初瀬はまた芋をつくる里
盆栽を捨てしと魏竹雞頭に

陶印を惠まれしに

上りよきを窯主に照る雞頭あり

衰へて伐りも残さず葉雞頭
誰が植ゑて雁來紅や籠り堂
あるが中かまつかの繪に賛しけり

駕籠溜り佐野瀑園や葉雞頭
干屑の麻苧かゝるや葉雞頭
朝稻妻奇しき見る雁來紅の下

香墨居

蘭 凋落す雙樹の下に蘭のあり

稻の花 雨に出しが行手の晴れて稻の花

大河原停車場にて偶然種竹山人と會す

稻 山を出で、稻を見つ君の詩をも得つ

稻の蟲に博士の見舞ふ在所かな

種竹山人の計に接す

ことし亦た山を出て稻を見たれども

落穂 葉束を括る小首の一穂かな

豊かなる年の落穂を祝ひけり

蕎麥の花

初瀬に来て法師なつかし蕎麥の花
蕎麥の花月村といふ俳人あり
淋しさも不時の歸省や蕎麥の花
杉谷の道あるかたや蕎麥の花

二本松城の跡かや蕎麥の花
蕎麥白き道すがらなり観音寺
本降りになるや首途の蕎麥白き
蕎麥白き方に次ぎ行く馬見ゆる
蕎麥畑の里の出岩や樟の立つ
刈田隈々蕎麥咲くや土佐は兼山祠
蕎麥さくや秋蠶に切りし桑一畝

唐辛子

夜に入りて蕃椒煮る臺所
さかしらに蕃椒くふ酒機嫌
一筵唐辛子干す戸口かな

露月送別

唐辛子も芋もなかりしこの別れ
一年を妻の藏めし唐辛子
味ひを鬼貫しれり唐辛子
鳴瀧や植木が中の蕃椒
芍薬もある古庭や蕃椒

鳳仙花
紙漉の戀に咲きけり鳳仙花

月草
まだ据ゑぬ庭石のあり月草に

蓼の花

温泉の匂ひ花かあらぬ歟蓼の花
蓼の花 草末枯れて水白し
料理屋に鄰れば赤き穂蓼かな

草の花

草花や貧家に植うる唐辛子
草花に大石据わる茶店かな
草花や湖の水つく通ひ路

足尾を出で、久藏川を溯る

むら 芒草花のある始めかな

蘆の花

蜷掘る舟静かさや蘆の花

蜉蝣飛ぶ曲り廣江や蘆の花
行徳の里は蘆の穂がくれかな
水馬をる静かさや蘆の花
蘆の穂に結ひ添ふ垣や原やしき
寶達の山 紫水明や蘆の花
沙よけのほとり穂蘆のむらくと
某庵
無花果のかげに白きは穂蘆かな
この道の三つ渡る川や蘆の花
穂蘆出て寒風山を背ろにす

蘆わ原ら

穂蘆立てば馬湯かと養魚場を見し

芋

青墓の野に庵室の芋畑
宵月に鮎とびをる葉芋かな
葉のせし芋の葉のやぶれかな

香墨居

出水引いて芋も肥えけり裏廻り

麻昔の爲に其の病魔を叱す

句徳無邊大に芋を食ふべし
葉芋高き宿にとまるや晴三日

家々に芋の高さや棉處
山中に句境開けて芋高し
芋の論の口角を畫僧畫きけり
素讀すみて子の手習や芋煮ゆる

房州の茶店に憩ひて子規子を思ふ

砂糖木
砂糖木を噛む子昔もをりつらん

黍
日西にいづれかみのる黍と粟
黍の穂はきのふや伐りし小鳥網
黍踏んで日がな篩へる翁かな
唐黍や門を入りたる爪上り

唐黍をくひこぼす市の童かな

粟 粟の穂を摘みおくれたる野分かな

稗 稗殻の垣結ふ里の温泉かな

南瓜 大穴を鴉の食ひし南瓜かな

道人著南瓜問答とや云はん
師の病よき頃南瓜煮たりけり

烏瓜 堤の木ひよると立つなり烏瓜

竹の花も見ゆる徑や烏瓜

樹上より蛇落つて烏瓜
海棠の落葉になりぬ烏瓜
誰が置いて鳧鉦の中や烏瓜

瓢 吐せども酒まだ濁る瓢かな

瓢の繪其贊百池奪ひけり
黄箋に畫きとりたる瓢かな

殆ど百題を作つてこの秋の俳三昧を終る
百題のどんじりにある瓢かな

糸瓜 糸瓜にも昔ある世となりけり

奇に非ず凡にあらざる糸瓜かな
鶏頭と葉菊糸瓜の下にある
棚作り藁屋の外の糸瓜かな

子規舊草廬

寺にする慈悲開眼の糸瓜かな
柿の木のおき庭にも糸瓜かな

悼逸夢

極樂の道の糸瓜になられけむ

末枯

此頃や末枯の芝刈る遅し
末枯に錦木立てる門邊かな

末枯の紅にして蓼なるべし
末枯にのこる薊やおそろしき
末枯の南瓜一つや庵の畑
末枯や鴻の巢籬の衣の色
末枯の見通しの家壊ちけり
末枯の川原蓬や蛇出づる
頬白が一羽淋しう末枯るゝ
會津城
末枯の漆落葉を踏み行きぬ
鹽原
末枯に焼木の埒の廣さかな

三年木杉とも 蕨末枯るゝ
境木の築地になりぬ末枯れて
末枯に古碑も見んさはれ酌むよけん
末枯の丘越えは銀杏寺反れて
末枯れに道迷ふ湖面いや照りて

破蓮

水落ちの泡沫蓮も破れたり
葉破れ莖折れて蓮の臺かな

菌

さきんぜし人を憎むや菌狩
菌狩やきのふの雨の小松山

送露月

毒草の食ふべからざるを悟り君歸る
茱萸の枝かたげて出でぬ菌狩
昆陽みぞろ蕈山戻りたそがるゝ
屯して烟上げゝり菌山
草にさして菌の笠のつぶれかな
落栗を拾ひ菌を採らまくす

葛

葛からみ藤からみ松の風騒ぐ

葛紅葉

岩立ちに鞍馬の杉や葛紅葉

草紅葉

墓所近き小家構へや蔦紅葉
回祿の土も苔蒸す蔦紅葉
藁散つてもみづる草の堤かな
雞の尾のしだれの草も紅葉かな
蜻蛉の羽黒に染めつ草紅葉
菜畑の中の堤や草紅葉

雑

留別

なれそめし詞も秋のうき別れ

香墨庵にて

僂俛歳餘雙樹の秋の庵主かな
川魚子を摺るといふ秋の題を得つ

露月居にて

山神と河伯と君と我の秋

古口といふは千規がむさき宿と記せし所なり

宿帳に大字落々と記す秋

有磯吟社に

北そよと吹けば有磯の荒るゝ秋
白山にて

灰降りし雪掻きぬ小草秋萌えて

鎌倉江の島漫吟抄二十五句

翠濤庵

芝植ゑて萩も芙蓉もからげゝり

途上

松の中に夥しさよ曼珠沙華

由井ヶ濱

秋の潮藻の寄る處かはりけり

鎌倉權五郎社

社かや寺かや銀杏紅葉せる

長谷寺

鳥渡る海光院の空見れば

大佛

絶々に蛸鳴くやうしろ側

壽福寺

禪林に狗あり吠て秋の聲

鎌倉右大臣の墳、墳前一むらの芒

残るもの金槐集の芒かな

若宮

みやびなる宮作りなり薄紅葉

頼朝墓

樟椿榎の大樹や露時雨

大江廣元墓

杉なくて松ひやゝかや覺阿公

鎌倉宮

蝨飛ぶ叢踏むや鳥居前

滑川

名にし負ふ水冷やかに流れけり

北條屋敷

この門を出でし政事や破芭蕉

日蓮辻説法靈跡

粟黍も説法の穂を垂れにけり

翠濤庵一泊

鎌倉の蚊帳の別れとなりけり

鎌倉名物

秋の季に鮑も漏れぬ鮮貝など

明くる日徒歩江の島に向ふ、七里が濱即事

芒生ふるる山控へたり汐煙

龍の口五重塔新建立

足場取る日も近づきぬ赤蜻蛉

片瀬

冬之部

別荘に向日葵ばかり植ゑにけり

江の島に渡る

沙濱に宿引も居る蜻蛉かな

江の島

江の島や秋海棠に貝細工

岩屋

秋の灯の岩屋の奥にとりけり

歸途雑事

引きしあとたゞみかくるや罾網
あらぬ方に雲落つるなり秋の雲

(明治三十六年)

時 候

初 冬 初 冬 の 城 遠 き 里 稻 を 干 す

川 筋 の 驛 の 荷 着 き や 冬 に 入 る

冬 に な り ぬ 逗 留 の 客 を 待 つ 心

冬 來 る や 尙 乘 り 締 む る 馬 五 頭

出 羽 人 も 知 ら ぬ 山 見 ゆ 今 朝 の 冬

鹽 濱 や 初 冬 汐 の 晝 に 満 つ

小 春 品 川 の 海 静 か な る 小 春 か な

演 習 の 前 衛 休 む 小 春 か な

山中の積木に休む小春かな
日の出見て山下りし里の小春かな
畚の中雀来て居る小春かな
小者つれて島長ぶりの小春かな
宮の大樹伐ると噂の小春かな
埋れ木を掘る里人の小春かな
日頃通ふ駄馬米を積む小春かな
小春日の里にお助け普請かな
佐渡でいふ國中平小春かな
さはれ河陽の大典の一や小春風
晝星の木山が峽や小六月

馬賣れて牛に別れや牧小春

短日 牛羊の牧短日の歩みかな

短日の馬休ませて田家かな
短日に御者の眠れる車蓋かな
短日やさそはれ出でしかげ詣り
榜し牽く乳屋が牛に日短き

冬夜

木の精を夢むまさしき夜半の冬
一器の食明日を思ふや宵の冬
冬の夜や果樹の園主が論議稿

冬の夜に火の見の下の焚火かな

冬ざれ

冬ざれや砂吹きつくる落柱

冬ざるゝ砂に色なきヒトデかな
洲つゞきにかゝれる橋や冬ざるゝ

寒さ

かしこまる易者の前に人寒し

寒林の貧寺焼けたり僧の留守

海近き橋に真晝の寒さかな

叱られて猿の齒ぐきの寒さかな

刈跡の葭原寒し水溜

鞍とれば寒き姿や馬の尻

伊豆の海や大島寒く横はる

餘生の計を聞て

返りごととすべき文ある寒さかな

弔鐵眼禪師

残りける君も亦亡き寒さかな

觀魚庵商賣甚だ振はず

釜の銘寒雉といふも寒さかな

俳三昧 雜詠二句

難行を天下に誇る寒さかな

寒燈の下や俳魔の影もなし